

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平11-30226

(43) 公開日 平成11年(1999) 2月2日

(51) Int.Cl.<sup>6</sup>

識別記号

F I

F 1 6 C 11/10

F 1 6 C 11/10

C

H 0 4 B 1/38

H 0 4 B 1/38

H 0 4 Q 7/32

H 0 4 M 1/02

C

H 0 4 M 1/02

H 0 4 B 7/26

V

審査請求 有 請求項の数 5 F D (全 5 頁)

(21) 出願番号

特願平9-196385

(22) 出願日

平成9年(1997) 7月8日

(71) 出願人 390010179

埼玉日本電気株式会社

埼玉県児玉郡神川町大字元原字豊原300番  
18

(72) 発明者 鳥羽 誠人

埼玉県児玉郡神川町大字元原字豊原300番  
18 埼玉日本電気株式会社内

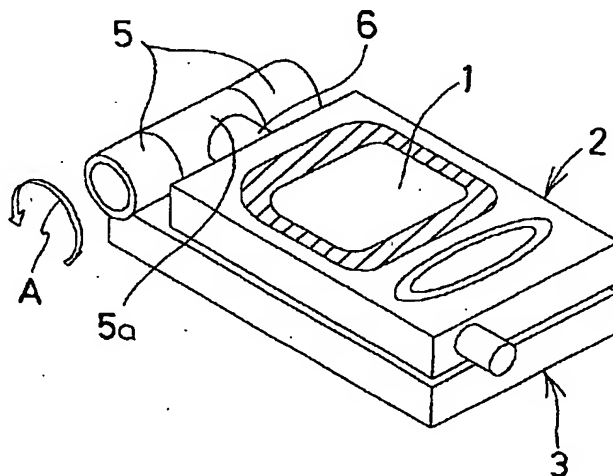
(74) 代理人 弁理士 原田 信市

(54) 【発明の名称】 折り畳み式携帯型電子機器

(57) 【要約】

【課題】 表示部側筐体と操作部側筐体とを折り畳んだ状態にしたままでも、表示部側筐体の表示部上の表示を容易に目視確認することができる折り畳み式携帯型電子機器を提供する。

【解決手段】 表示部側筐体2と操作部側筐体4とを連結するヒンジ5の軸部5aに、表示部側筐体2を表裏反転可能とするピボット6を直角に設け、表示部側筐体2を裏返しにして折り畳んだとき、表示器1が露呈するようにする。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】表示部を有する表示部側筐体と、操作部を有する操作部側筐体とを、ヒンジにより互いに折り畳み可能に連結した折り畳み式携帯型電子機器において、前記表示部側筐体と操作部側筐体との間に、表示部側筐体を表裏反転可能とするピボットを設けたことを特徴とする折り畳み式携帯型電子機器。

【請求項2】ピボットを、その軸線がヒンジの軸線と直角になるようにヒンジに設けたことを特徴とする請求項1記載の折り畳み式携帯型電子機器。

【請求項3】ピボットを、表示部側筐体と操作部側筐体との間で電気配線等が可能となる中空構造としたことを特徴とする請求項1又は2記載の折り畳み式携帯型電子機器。

【請求項4】ピボットに、表示部側筐体が表裏反転したところで回転を制限する回転制限機構、及びそれによる回転制限状態をバネ力で保持するクリック係止機構を設けたことを特徴とする請求項1、2又は3記載の折り畳み式携帯型電子機器。

【請求項5】ピボットが、ヒンジの軸部に突設された固定軸筒と、表示部側筐体に突設された回転軸筒とを嵌合させて構成され、回転制限機構が固定軸筒と回転軸筒との間に設けられた案内溝と突起とで構成され、クリック係止機構が、固定軸筒と回転軸筒との間に設けられた突部と凹部とで構成されている請求項4記載の折り畳み式携帯型電子機器

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、携帯通信機（例えば携帯電話機）や携帯情報ツール等の携帯型電子機器、特に表示部を有する表示部側筐体と、操作部を有する操作部側筐体とを、ヒンジにより互いに折り畳み可能に連結した折り畳み式携帯型電子機器に関する。

## 【0002】

【従来の技術】図8及び図9に従来の折り畳み式携帯電話機を示す。従来の折り畳み式携帯電話機は、受信待機時及び携帯時には図9に示すように小さく収納できるようにするため、液晶表示器51を設けた表示部側筐体52と、操作ボタン53を設けた操作部側筐体54とをほぼ同じ大きさとして、これらをヒンジ55で連結して二つ折り状態に折り畳めるように、また図8に示すように、折り畳み状態から開いて通話するときには、受話部と送話部との距離ができるだけ大きくなるように、表示部側筐体52にレシーバ、操作部側筐体54にマイクロホンをそれぞれ設けている。

## 【0003】

【発明が解決しようとする課題】しかし、このような従来の構造では、表示部側筐体52と操作部側筐体54とは、ヒンジ55のみにより連結され、それらは、矢印Aで示すように単に一方方向にのみ開閉するだけであり、折

り畳んだ状態では、液晶表示器51と操作ボタン53とが向かい合って両筐体52・54に挟まれた状態で完全に隠蔽されてしまう。

【0004】そのため、受信待機時及び収納時等の折り畳み状態では、液晶表示器51に表示される充電状態や現在時刻や電波状態等を目視確認できないので、それを確認するには、表示部側筐体52を操作部側筐体54に対して開いた状態にして、液晶表示部51を露呈させざるを得ない。従って、通話時以外に、充電状態や現在時刻や電波状態等を目視確認するには、両筐体52・54の開閉操作をその都度行わなければならなかった。

【0005】本発明の目的は、上述した問題点を解決し、表示部側筐体と操作部側筐体とを従来と同様の形態で使用できるのに加え、それらを折り畳んだ状態にしたままでも、表示部側筐体の表示部上の表示を容易に目視確認することができる折り畳み式携帯型電子機器を提供することにある。

## 【0006】

【課題を解決するための手段】本発明は、表示部を有する表示部側筐体2と、操作部を有する操作部側筐体4とを、ヒンジ5により互いに折り畳み可能に連結した折り畳み式携帯型電子機器において、表示部側筐体2と操作部側筐体4との間に、表示部側筐体2を表裏反転可能とするピボット6を設け、表示部側筐体2を裏返しにすることで、折り畳み状態でも表示部の表示を目視できるようにしたものである。

【0007】ピボット6は、その軸線がヒンジ5の軸線と直角になるようにヒンジ5に設ける。また、ピボット6は、表示部側筐体2と操作部側筐体4との間で電気配線等が可能となる中空構造とする。

【0008】ピボット6には、表示部側筐体2が表裏反転したところで回転を制限する回転制限機構、及びそれによる回転制限状態をバネ力で保持するクリック係止機構を設けることができる。

【0009】ピボット6は、ヒンジ5の軸部5aに突設された固定軸筒7と、表示部側筐体2に突設された回転軸筒8とを嵌合させて構成でき、回転制限機構は、固定軸筒7と回転軸筒8との間に設けられた案内溝11と突起10とで構成でき、クリック係止機構は、固定軸筒7と回転軸筒8との間に設けられた突部12と凹部9とで構成できる。

## 【0010】

【発明の実施の形態】次に、本発明の実施の形態を図面に基いて詳述する。

【0011】図1ないし図7に、本発明を折り畳み式携帯電話機に適用した実施例を示す。この携帯電話機は、例えば液晶による表示器1を設けた表示部側筐体2と、操作ボタン3を設けた操作部側筐体4とをほぼ同じ大きさとして、これらを、図1の矢印A方向に回転するヒンジ5で連結して二つ折り状態に折り畳めるようにしたこ

とは、図8及び図9に示した従来例と同じであるが、このような構成に加え、表示部側筐体2を、ピボット6によりヒンジ5の軸部5aに対して矢印Bで示すように旋回可能にして、表示部側筐体2を表裏反転させることができるようにしている。

【0012】ピボット6は、ヒンジ5の軸部5aの中央にその軸線と直角になるように突設されている。ヒンジ5の軸部5aは電気配線等のために中空になっているが、ピボット6も、表示部側筐体2と操作部側筐体4との間の電気配線を挿通させることができるように、中空構造となっている。ピボット6の構造を図2ないし図5を参照して説明する。

【0013】ピボット6は、ヒンジ5の軸部5aより突出した中空のボスである固定軸筒7に対して、表示部側筐体4の一端面の中央より突出した中空のボスである回転軸筒8を回転自在に嵌合させることにより、表示部側筐体2を旋回可能としている。その旋回は、180度以上の角度にしても意味がないばかりか、ピボット6中を挿通させる電気配線を破損する恐れがあるので、その角度を180度に制限する次のような回転制限機構及びクリック係止機構を、ピボット6の内部に設けている。

【0014】固定軸筒7には、大径部7a、小径部7b及びこれらの間の段部7cが有り、また回転軸筒8には、大径部8a、小径部8b及び先端リング部8cが有る。この先端リング部8cには、図3に示すように、2個の円形のクリック係止用凹部9が180度の間隔をもって形成されているとともに、一個の回転制限用突起10が設けられている。また、固定軸筒7の段部7cには、ほぼ180度の円弧長さの回転制限用案内溝11が形成されているとともに、一個のクリック係止用突起12が設けられている。

【0015】固定軸筒7には、ヒンジ5の軸部5aに対する回り止めのための回り止め用溝7dが設けられ、同様に回転軸筒8にも、表示部側筐体2に対する回り止めのための回り止め用溝8dが設けられている。

【0016】回転軸筒8の先端リング部8cは、固定軸筒7の小径部7bの外周に回転摺動自在に嵌合している。この小径部7bの回りには、その雄ねじ部に螺合させたバネ押さえナット13で押さえられたコイル状バネ14が配置されている。先端リング部8cは、このバネ14の力で固定軸筒7の段部7c側に付勢されているので、回転制限用突起10が回転制限用案内溝11に入り込んでその底面に圧接する。このため、回転軸筒8は、固定軸筒8に対して抜出することなく、回転制限用案内溝11の円弧長さによって決まる180度の角度だけ回転可能になっている。そして、回転制限用突起10が回転制限用案内溝11の一端と他端にくるところまで、回転軸筒8が回転すると、クリック係止用凹部9と突起12とがバネ14の力を受けた状態のまま嵌合するので、回転軸筒8は固定軸筒7に対する回転を係止される。

【0017】従って、表示部側筐体2は、操作部側筐体4に対して180度だけ旋回可能で、表示器1が操作ボタン3と向かい合う姿勢と、その反対向きの姿勢とに反転させることができるので、図6に示すように、表示器1と操作ボタン3とが向かい合って両筐体2・4に挟まれる通常折り畳み状態と、図7に示すように、ピボット6を中心に表示部側筐体2を反転させて、その表示器1を含む表面全部が露呈したままとする反転折り畳み状態とを、任意に切り替えることができる。

【0018】図6の状態から図7の状態へ、逆に図7の状態から図6の状態に切り替えるには、表示部側筐体2を操作部側筐体4に対して一旦90度以上開いた状態にしてから、表示部側筐体2を180度旋回させて表裏反転させ、その後再び折り畳めばよい。

【0019】図6の通常折り畳み状態した場合には、表示器1が隠れてしまうので、その表示機能、例えば充電状態や現在時刻や電波状態等の情報は確認できないが、一般に表示器1は液晶によるため衝撃に弱いので、このような折り畳み状態にしておけば、外的な衝撃力や傷から表示器1を保護することができる。

【0020】一方、図7の反転折り畳み状態にした場合には、コンパクトに折り畳んだ状態であっても、表示器1の表示を容易に確認できる。

【0021】例えば、本携帯電話機を充電器に装着して充電する場合にも、表示器1の表示が確認し易く、場所もとらない。従来、充電器ホルダは、携帯電話機が折り畳み式の場合、その表示を確認できるように携帯電話機を開いた状態で装着するように設計されていたため、必要以上に大きくなってしまっていたが、図7のような状態で充電できれば、充電器ホルダの小型化が可能になる。

【0022】また、折り畳み式携帯型電話機は、筐体を開いた状態とすると大きいために、車載ホルダに装着した状態では車の運転操作の変速時等に肘にあたる可能性があり危険であったが、図7に示すような折り畳み状態で車載ホルダに装着できれば、表示の確認が筐体を開かなくともできるので、コンパクトであるため、運転の妨げにならず、車の安全運転の面でも利点がある。

【0023】

【発明の効果】以上説明したように本発明によれば、次のような効果がある。

① 表示部側筐体をピボットにより表裏反転可能としたので、折り畳んだ状態にしたままでも、表示部側筐体の表示部上の表示を容易に目視確認することができる。

【0024】② 充電器に装着して充電する場合にも、折り畳んだ状態のまま表示部の表示を見ることができるので、充電状態等の確認がし易く、場所もとらない。また、従来、充電器ホルダは、携帯電話機を開いた状態で装着するように設計されていたため、必要以上に大きくなってしまっていたが、本発明によると折り畳んだまま

5

6

充電できるので、充電器ホルダの小型化が可能になる。

【0025】③ 車載ホルダに装着して使用する場合、表示の確認が筐体を開かなくともできるので、コンパクトであるため、運転の妨げにならず、車の安全運転の面でも利点がある。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明による折り畳み式携帯電話機の斜視図である。

【図2】同携帯電話機のピボットの断面図である。

【図3】ピボットを構成する回転軸筒の下面図である。

【図4】ピボットを構成する固定軸筒の上面図である。

【図5】ピボットの分解斜視図である。

【図6】図1の携帯電話機の通常折り畳み状態を示す斜視図である。

【図7】同じく反転折り畳み状態を示す斜視図である。

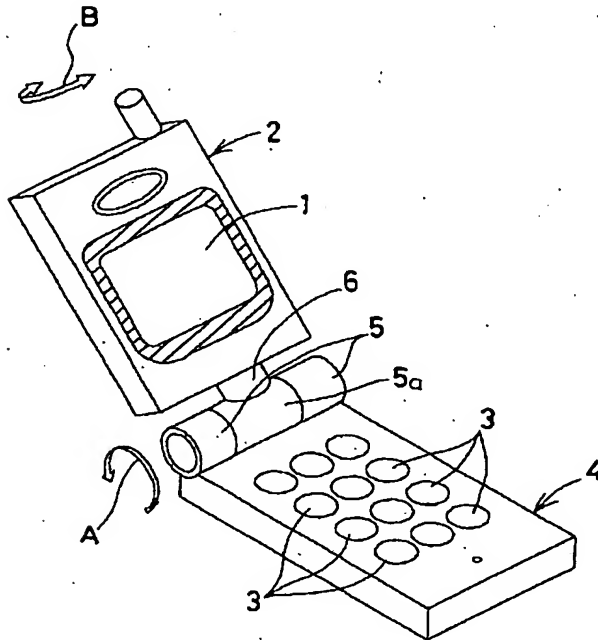
【図8】従来の折り畳み式携帯電話機の開いた状態の斜視図である。

【図9】同じく折り畳んだ状態の斜視図である。

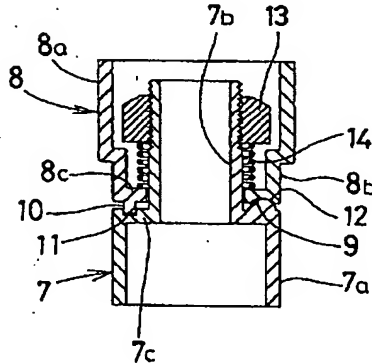
【符号の説明】

- 1 表示器
- 2 表示部側筐体
- 3 操作ボタン
- 4 操作部側筐体
- 5 ヒンジ
- 5a 軸部
- 6 ピボット
- 7 固定軸筒
- 8 回転軸筒
- 9 クリック係止用凹部
- 10 回転制限用突起
- 11 回転制限用案内溝
- 12 クリック係止用突部
- 14 バネ

【図1】

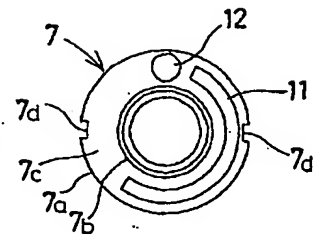
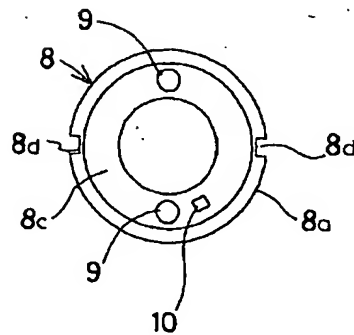


【図2】

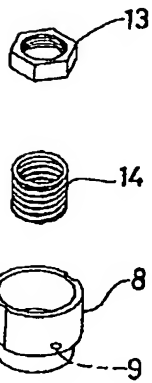


【図3】

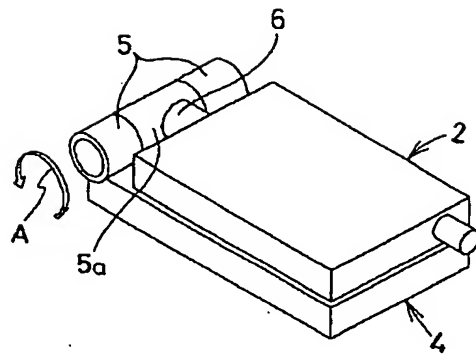
【図4】



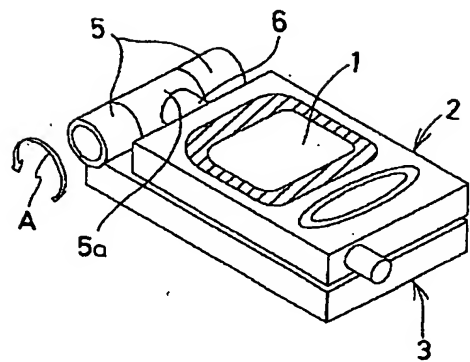
【図5】



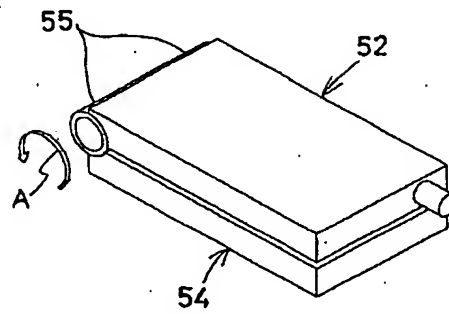
【図6】



【図7】



【図9】



【図8】

